

リハビリテーションとグループ療法

Rehabilitation and group therapy

リハビリテーションの主流は、入院や外来患者に対し個別に行われるものである。一方で、患者の社会的技術の向上や居場所の確保、家族教育を行うためには集団療法が有効と思われるが、リハビリテーションの分野では、その経験の蓄積が不十分である。本特集では、さまざまな分野で集団療法を実践されている専門家に、集団療法の実践の紹介と各分野の課題を解説していただいた。

脳卒中 山川百合子氏 809

リハビリテーションのグループ療法の究極の目的は心を動かすことである。脳卒中の場合、中途障害がほとんどで、そう簡単に心を動かしたり、開いたりすることはできない。「自分の日常生活をどう営んでいくか」というテーマに視点を当てて、次第に自らが語る心情を支えていくことが重要である。回復期リハビリテーション病棟の中でのリエゾン活動をしている精神科医として、最も多い病態である脳卒中に関してのグループ療法について解説している。

パーキンソン病 岡本昌幸氏ら 815

パーキンソン病患者は、疾患の進行に伴い二次的な機能障害も発生し、日常生活活動や社会参加が障害される。したがって社会的コミュニケーションの問題や社会参加の減少に対しては、従来の個別運動療法のみでは対応が不十分である。複数名の患者に対する集団運動療法と個別運動療法を併用することにより、運動機能の改善だけでなく、社会的コミュニケーションや社会参加にも有効に作用する可能性がある。筆者らが実施している集団運動療法を併用した外来リハビリテーションプログラムについて紹介している。

高次脳機能障害者を対象としたグループ療法 岡村陽子氏 821

現在、認知リハビリテーションとして推奨されるグループ療法は、包括的全人的神経心理学的リハビリテーションと脳外傷後のソーシャルスキルトレーニングであるが、リハビリテーションにかかわる心理士の少なさや診療報酬の対象とならないことなど、日本における実践にはまだ多くの課題が残されている。高次脳機能障害者を対象としたグループ療法について、これまでに報告されたエビデンスと、海外での実践例、わが国での実践例などについて解説している。

成人期の発達障害に対する集団プログラム 水野 健氏ら 827

自閉症スペクトラム症 (autistic spectrum disorders ; ASD), 注意欠如多動症 (attention-deficit hyperactivity disorder ; ADHD), とともに心理社会的治療の重要性, 必要性の認識が高まっている。昭和大学附属鳥

山病院では2008年よりASDを中心とした発達障害専門外来・デイケアを開設し、さらに2013年よりADHD専門外来の開設と同時にADHD専門集団プログラムを実施している。同院の臨床経験を紹介しながら、専門プログラムの概要とその効果、集団療法の意義、今後の課題について概説している。

認知症における集団療法 坂本将徳氏ら 833

「暴言・興奮・抑うつ・物盗られ妄想」などの認知症の行動・心理症候（behavioral and psychological symptoms of dementia；BPSD）の発生が、認知症高齢者自身やその介護者にとって多くの弊害をもたらしている。認知症に対する集団療法は、BPSDの改善や介護負担の軽減につながる可能性があるが、エビデンスが確立しているとはいえ、エビデンスの構築が必要である。筆者らの施設において実践している、①レクリエーション療法、②音楽療法、③園芸療法、④コスメティック療法などの特徴と期待される効果について紹介している。

書評 お知らせ	絵でみる脳と神経, 第4版 しくみと障害のメカニズム (評者: 森岡 周) 832
	第13回呼吸リハビリテーションサイエンスフォーラム 838
	埼玉県立大学研究開発センターシンポジウム2018 852
	第19回日本臨床リハビリテーション心理研究会 852
	第5回日本サルコペニア・フレイル学会大会 852
	第8回日本リハビリテーション栄養学会学術集会 873
お詫び 832	